

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成26年7月21日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 人間・環境学研究科

職 名・学 年 修士課程2年

氏 名 赤 桐 敦

助成の種類	平成26年度・若手研究者在外研究支援・国際研究集会発表助成		
研究集会名	2014年日本語教育国際研究大会 SYDNEY-ICJLE2014		
発表題目	1900年前後の日中間の言語教育政策の接触 — 盧戇章が見た総督府の公教育政策— A contact of Sino-Japanese language education policy around 1900 : Focusing on Lu Kan-chang and public education by the governor general of Taiwan		
開催場所	オーストラリア・ニューサウスウェールズ州・シドニー・シドニー工科大学		
渡航期間	平成26年 7月 7日 ~ 平成26年 7月13日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	250,000円	
	使用した助成金額	250,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	学会参加登録料	25,000円
		査証手数料	2,000円
		航空費	131,980円
交通費(鉄道賃、バス賃)		22,400円	
	宿泊料	68,620円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 業績がなく研究費の申請が難しい院生に、国際的な学会に参加する機会を与えていただきました。これを機会に、研究を磨き、論文投稿につなげていきたいと考えます。 手続きも簡便で、研究の負担にはなりませんでした。 今後、より多くの院生や若手研究者にこのような機会が与えられることを望みます。		

成果の概要

人間・環境学研究科 修士課程2年
赤桐 敦

【学会概要】

日本語教育国際研究大会は、アメリカ、欧州、中国などの9つの国と地域の日本語教育学会の会員が集う世界的な研究集会である。各国の異なる言語政策や文化背景のもとで行われる、日本語教育の課題や研究成果について、様々なセッションで発表・討議する。

今大会は、SYDNEY-ICJLE2014として豪州がホスト国となり、シドニー工科大学で開催された。参加者の総数は、前大会実績で2101人であり、今回も各国からの研究者が多数参加していた。

【発表内容】

筆者の発表は「言語政策」のセッションで行われた。筆者は、盧戇章が提言した、中国における音声文字を用いた教育による近代化と、日本の言語政策との関わりについて論じた。音声言語を共有する小規模な言語共同体を、一国一言語の国家共同体に改変するには、音声言語を記述する文字と、それによって綴られた語彙と文法、出版された教材、それらを教える学校教育制度が必要となる。

このような音声言語を再生産するシステムの導入を、中国人で初めて訴えた人物が盧である。盧は、最初の著作である『一目了然初階』(1892)で、漢字の学習困難性が中国人の近代的な知識習得を妨げているとし、音声文字の導入と公教育制度の確立を訴えた。盧は当初、プロテスタント宣教師が中国に持ち込んだ音声記述の方法を模倣したが、その後1906年に出版した『北京切音教科書』では、日本の仮名文字表記をまねた。

本発表では、盧が『一目了然初階』の発表後、1900年前後に台湾に渡り、領台初期の台湾総督府の言語教育政策に関わったことに注目した。盧が渡台した経緯、台湾における活動、盧が台湾総督府に与えた影響と、盧が台湾総督府から受けた影響について調査を行い、彼の足跡を通じて、1900年前後の日中間の言語教育政策がどのように相互に接触したのかを解明した。

発表の流れとして、まず現代中国や日本で高まるナショナリズムの起源として、近代化の過程で音声言語による教育が行われるようになったことを指摘した。次に、中国人として初めて、音声言語を使用した教育による近代化を訴えた盧の『一目了然初階』を分析し、そこで提言された文字と教育に関する課題が、現代中国の言語政策の課題と一致することを確認した。その後、これまで明らかでなかった台湾における盧の活動について報告した。最後に盧が中国に帰国後出版した『北京切音教科書』を分析し、渡台後の主張の変化について検討した。

【発表後に得られた反応】

本発表は、日本語教育や言語政策に関わる現代的な話題ではないため、関心を持つ研究者が少ないのではないかと、言う危惧があった。しかし、中国人や台湾人研究者、文字学や国語学の研究者から質問があり、中華圏でも一般に知られていない盧戇章と言う人物や、領台初期の台湾総督府の言語政策で宣教師や中国人の言語研究が参考にされていたことに関心が寄せられた。

具体的には、盧が現代中国でどのように評価されているのか、彼の主張が現代中国の言語政策にどのようにつながるのか、言語とナショナリズムの関係について、などの質問を受けた。また、国語学の専門家からは、用語の使用法についての間違いの指摘や同時代の国語教科書との関連についてさらに深く掘り下げるようにとの提言を受けた。

これらのコメントによって、現在執筆中の投稿論文に具体的な示唆が得られた。これまで、研究がどのように評価され、どこに関心が集まるのか把握できていなかったが、研究者とのやり取り

りによって、研究がどのように読まれるのかが分かった。コメントをいただいた研究者とは名刺を交換し、帰国後も交流を続けている。

【学会参加による成果】

学会に参加し、各国の、さまざまなレベルで日本語教育に従事する研究者の研究成果を聞くことにより、日本では得られない知見を得た。例えば、Monash UniversityのRobyn Spence Brownによれば、近年、豪州の中等教育で日本語学習者が減少傾向にあり、その要因が、一般によく言われるアジアにおける日本のプレゼンスの低下だけでなく、豪州で英語を話せば外国語を学ぶ必要がないと考える保守的な考えが広まっていることにあると言う。政府もそれに応じて外国語教育の予算を大幅に削減しており、現在の豪州には「言語政策はなくなった」とのことだった。日本にとって、理想的な多言語社会モデルとして頻繁に取り上げられてきた豪州でも、英語による一元化が進んでいることは衝撃的だった。

多くの研究者と知り合い、また日本国内でもなかなか会えない研究者と再会し、近況を聞くことができた。これを契機に、今後は国内外の学会における口頭発表や論文投稿をより活発に行っていきたい。

【謝辞】

まだ研究者としては駆け出しですが、このような研究集会への参加回数を重ねるごとに、ネットワークが広がり、研究者として認知されてゆくと考えています。今回は開催地が日本から遠く、物価も日本より高くなることから、参加を半ばあきらめかけていたところ、本助成金を知り、応募いたしました。このような貴重な機会を与えてくださった貴財団に心から感謝申し上げます。